



TITLE:

京都外科集談会第350回例会

AUTHOR(S):

CITATION:

京都外科集談会第350回例会. 日本外科宝函 1959, 28(2): 711-714

ISSUE DATE:

1959-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206759>

RIGHT:

京都外科集談会第350回例会

昭和33年10月30日

(1) Premedication としてオビスコ静注使用の経験

鳥取日赤外科 塚田 朗・熊野道夫・
芦川 喬

5~72才の腰麻及び局麻による入院手術患者74例に、オビスコ静注による Premedication を行つた。一般に呼吸数が減少するが、みるべき副作用なく、全例に簡便且つ安全に使用出来、効果は年少者及び高齢者に著者であつた。尚3例の予備試験にて、平均20.2%の分時呼吸量の減少をみた。

(2) 大腿皮下に寄生した Manson 条虫の1例

外科 阿部 弘毅

右大腿内面皮下の無痛性腫瘤を主訴とした京都市内に在る29才の婦人に本条虫の1例を経験したので報告した。患者は6年程前、心臓脚氣に悩み民間療法にて雨蛙が効果があると聞きその5~6匹を生食したという既往があり、本条虫の第2中間宿主である蛙への寄生率から見て伝染源となつたことはまず間違いないと思われる興味ある症例であつた。本条虫の本邦に於ける分布地域、人体への寄生部位並びに第2中間宿主についても文献的考察を加えた。

追加 杉本 雄三

蛙で想い出しましたが、私の処でも治療の為、青蛙を10数匹生きた儘吞み、1ヵ月後腹部皮下に無痛性腫瘤を来して来院、腫瘤剔出しました。好酸球の浸潤が認められるのみで何か寄生虫の為であろうとの病理診断でした。

追加 田辺 賀啓

演者の発表症例に生蛙の食用の経験があつた由であるが、11年前に三重県下で第2中間宿主である蛙について調査したことがあるので報告する。

四日市、徳和、津、白子、伊勢、鳥羽、奥津等で夫々数10匹採取総計347の中6%に認めた。Plerocercoid の認められたのは津、白子に於て採取したもので、他の場所では20~60匹程度の検査では認められなかつた。

(3) Meralgia paraesthetica について

国病山中整形 広谷 速人

Meralgia paraesthetica とは腓側大腿皮神経領域に局限して現われる異常知覚である。欧米に於いては一つのclinical entityとして稀しいものではないが、本邦に於ける報告は少い。

われわれは最近相次いでその数例を経験した。即ち純末梢性鼠蹊韌帯ないし大退筋膜の部位での刺戟によると思われるもの3例、根性の神経圧迫によると思われるもの2例であつて、異常知覚の非定型的な症例も含まれる。

このうち2例に対して鼠蹊韌帯切離術を行い良結果をうることが出来た。

質問

木村 良司

患者の lokal に変形はなかつたか、我々も丁度今述べられた如き患者を現に入院させて調べているが、知覚異常のある大腿外側に限局性筋萎縮がある。然し筋電図、血管造影等では何の変化もない。皮膚組織には sklerodernia の変化を有するが、内分泌学的には全然異常がない。従つてこれは今云われた Meralgia paraesthetica で、Sklerodermia の組織変化は lokal の trophische Störung と考えられる。同様の変形がある症例に遭遇されたならば又御報告願ひ度い。

答

広谷 速人

腓側大腿皮神経に植物神経線維が含まれるとの報告があります。症例1で皮膚に妊娠線のような白線がありました。Muskelatrophie については本報告では純粹に知覚障害の見られるもののみにとどめました。

(4) 辜丸破裂の1例

鳥取日赤外科 塚田 朗・熊野道夫・
芦川 喬

8才男、低鉄棒より落ちショック状態を呈した。左側鼠蹊部有痛性腫瘤を主訴とし、左側辜丸が2ヵ存在する様に思われたが、手術により辜丸白膜及び副辜丸が完全に離断し、上半部が鼠蹊部へ転位して居り、陰囊内には白膜及び副辜丸の一部が残存している事が判明した。

(5) 耳下腺粘表皮癌の1例

外科Ⅱ 恒川謙吾・篠原秀幸

62才女子の右耳下腺に発生した粘表皮癌の1例を経験したので、其の組織学的特徴、臨床症状、治療等に就て、2～3の文献的考察を加えて報告した。

(6) 胃ポリープ

外科Ⅰ 半田譲二・近藤祐之

胃ポリープについて、最近教室で経験した症例中より5例をとり上げて報告し、更に多少の文献的考察を行った。

症例1は58才♂、症例2は55才♀、症例3は56才♂、症例4は65才♀、症例5は72才♂であつた。このうち前4者は良性胃ポリープであり、症例5は腺癌であつた。之等はいづれも不定の胃症状を呈し、広汎な胃切除を行ったものである。

文献及び上記症例を対照し、胃ポリープの症状、組織所見の特徴特にボールマンⅡ型の癌と、ポリープより悪性化せるものとの鑑別点、胃ポリープの悪性化の頻度等につき考察を行ったが、特に肉眼的に悪性腫瘍との鑑別がつきにくく、又、悪性化の頻度が比較的高い点よりみて、ポリープだけの切除でなくポリープを含めた広汎な胃切除を行うべきである事を強調した。

(7) 上皮性胃良性腫瘍3例

大和高田市市民病院外科

杉本雄三・猪木弘三・

放射線科

中江登志雄

肉眼的には胃ポリポージスであるが、その本態は慢性胃炎であるとも言い、ポリポージスの1型でもあると云う1群の胃疾患を報告する。患者は胃部膨満感、軽度の貧血、レ線学的に小円形陰影欠損、Estate-mammelloneを呈し、切除標本では幽門部から体部にかけて、無数無茎の小円形隆起を示し、大きいのはポリープ様である。組織学的には粘膜の炎症増生、変性、改造胃炎 Umbau-Gastritis 粘膜下筋層の肥厚分岐を示す。中山教授は6例を報告し、ポリポージスとしているが慢性胃炎（粘膜過形成）であろうと云い、吉田、武田教授は肥厚性胃炎で、時にポリープ状となるとしている。かゝる1群のものゝ報告例は最近の本邦にはあまりなく、中山の6例、小原氏の2例のみである、我々はポリープ6例中3例に本症を見たが、実際はかなり頻度の高いものであるまいか。その肉眼的所見から、悪性度はかなり高いものと考えられ、臨床医家にとつては腫瘍として扱われて良いのではないかと考え

る。注目して頂く意味で報告した。

質問

渡辺 浩策

胃ポリープ症がありながら症状を呈さぬため発見されないものも相当あり、又、こういう胃ポリープの上には胃炎或いは癌化といった変化が加つて症状を呈する様になり検査で発見されることもあるのではないかと思うが、

答

腹部疾患に限らず剖検を行つた屍体よりの胃ポリープの発見率は各報告者によりまちまちであるが、0.1～0.7%と報告されている。その他特に著明な症状を呈さない人に胃ポリープがどの程度存し得るかという統計は見出し得なかつた。

質問

半田 譲二

先生の症例で粘膜筋層下、或いは粘膜下組織に認めた細胞群の組織学的性質について。

答

貴兄の腺組織はやはり迷入腺組織の様ですね。私の場合は積極的に迷入腺組織であると云う証拠も、胃腺細胞組織であると云う証拠もありません、唯悪性化していない細胞群があると云う事です。しかし、感から云つてどうも胃腺細胞の様に思われます。

追加

近藤 祐之

演題第6の第5例の肉眼標本の所見は慢性胃炎様との事です、本例はポリープ潰瘍、扁平隆起部等すべてAdenocarcinomaでありました。スライドではポリープ状の部分の顕微鏡標本のみを示しました。

(6)(7)の追加

木村 忠司

Gastritisを伴っているからこれをGastritisとだけ言つてしまえば Polyp を伴ふぬものも含まれて面白くない。従つてやはり Gastritis と Polyposis を併記するか Polypöse Gastritis とするか、とに角 Polyp という名を銘記すべきであらう。Polyp にせよ Gastritis にせよ chronisch の Reiz により出来るもので共に Nerven の刺激像が強い。

(8) 手術時確認されなかつた胃憩室の1例

大和高田市市民病院

外科 猪木 弘三

放射線科 中江登志雄

胃憩室は憩室炎を伴わぬ限りそれ自体による臨床症状が軽いため発見される率は少ない。我々は最近便秘

症を主訴として来院した患者で腹部X線検査に際して偶然噴門部後壁に胃憩室像を認めた。結腸左半切除術に際し胃後壁を検したが発見されずそこで胃切開をなし胃内腔より手指で検索したが憩室或は壁の減弱部すら発見されなかつた。しかし術後透視でやはり憩室の存在を認めた。胃憩室の潰瘍との鑑別診断は難かしい。穿通性潰瘍の場合は左程困難ではないが、我々は噴門附近の Kissing ulcer で後壁が引きつられ憩室様像を呈しポリープと誤つた1例をも経験した。両例の写真を供覧し、あわせて若干の考察を行った。

(8) の追加

先日私は十二指腸に大なる憩室のある患者を手術したが、レ線で見ただけで開腹しただけで壁から凸出しては居らず、漿膜下に円形の異常の輪廓隆起せずを認めたのみであつた。これを輪廓に沿うてちよつと剝離して内圧を高めて見るとレ線所見通りに隆起した。憩室は常に開腹して見ただけではレ線像の如く隆起してはいない又十二指腸の漿膜のない部分を剝離すると人工産物として憩室をつくる。

(9) 胃に穿通した脾臓嚢腫の1例

外科Ⅱ 野々山 明

最近私達は手術を行わずに自然に胃に穿通治癒したと思われる興味ある脾臓嚢腫の1例を経験した。患者は66才の農夫で、入院約17日前より上腹部の炎症に続いて生じた小児頭丈の上腹部腫瘤を主訴とし、触診、腹部レ線所見等より、一応脾臓嚢腫と診断して手術を行う予定であつたが、入院約40時間後に多量のコーヒー残渣様吐血を来し上腹部腫瘤の消失をみた。本症例は恐らく炎症性機転に基く仮性脾臓嚢腫であり、自然に胃に破裂し内瘻を生じて治癒したものと思われる。

追加

木村 忠司

腹腔内の外傷性血腫は外瘻のみで治る筈であるが、仮性脾臓嚢腫がそれだけで治らぬということ、現にその中に脾臓の Ferment が見出されること等は、脾臓と何らかの交通があると考えなければならぬ。

(10) 嚢腫腎の2例

外科Ⅱ 三沢 郁夫・宮脇 英利

78才の女子、77才の男子の嚢腫腎を治癒したので White 及 Braunstein (1954) による嚢腫性腎疾患の分類を紹介し、嚢腫腎と単純性腎嚢腫との成因を述べ療法は主に保存的手術療法について述べ、且つ、我々の保存的手術療法を附加して述べた。

(10) の追加

木村 忠司

嚢腫腎は腎臓の機能は保たれていることが多いし、又家族的遺伝関係著明なものもあり、父親に嚢腫腎があつても別に悪性変化もせず長生きしている場合もあつた、その様な場合、腎臓は剔除しない方がよいと思う。

答

三沢 郁夫

① 嚢腫腎の嚢腫の処置方法は大きな嚢腫壁を破つて内容を吸引除去し嚢腫前壁の一部を切除したのち再び Primär に縫合閉鎖した。

② 遺伝関係に注意して患者に問いたしましたが本症例では遺伝関係は不明である。

或る人は、Mendel氏法則に従つて遺伝するかどうか、患者の家系に胸卒中の遺伝が濃厚であると云うも、これらは疑わしいと思います。

(11) 骨折と骨萎縮—そのレ線的研究

国病山中整形 広谷 速人

わたくしは昭和31年5月本会席上にて224例の骨折患者についてその骨萎縮を統計的に観察したが、今回はその経時的变化を追究し得たのでここに発表する。

前腕骨下腿骨下1/3以下の骨折を主とする48例のレ線の骨萎縮を観察した。

骨折後の骨萎縮は軟骨下海綿質ないし Metaphyse に初発し、次いで斑点状となるが、その全経過を5階段に分類するのを適當とする。骨折後骨萎縮は部位、年齢に関係なく、開放骨折か皮下骨折か、あるいは治療法の如何によつてその推移に遅速がある。即ち開放骨折や観血的治療を行つたものは局所循環障害が強く長期間にわたる為に緩慢な経過をとるのであろう。

小児に於いてはびまん性になる急性骨萎縮がある。

Diaphyseの骨折では mäusenfrass な萎縮を見る。膝関節の萎縮も足関節のそれと同一形式同一経過をとる。

追加

杉本 雄三

私も下腿骨折に対してキュンチャーを用いた場合特に骨萎縮の強い事を痛感しています。最近症例によつてはキルシナー鋼線を数本異方向より刺し込んで固定していますが骨萎縮もなく良いように思います。

答

広谷 速人

今回の調査材料には長管骨々折でKirschner 鋼線を用いた例はございませんが、行つて見たいと思います。

追加に対する質問 大匠大整 近藤 茂

Kirschner 鋼線は Küntzer 釘等と比べ、その金属材料が骨折部にあたえる化学的、生物学的影響は如何でしょうか。

- (12) 骨関節結核病巣内ストレプトマイシン濃度分布に関する研究 (第4報)
一特にカナマイシンと局所浸透性の比較について一

大医大整 近藤 茂

演者はのべ10症例の冷膿にSM又はKMを6.3)/ccとなる様に添加、後0, 1, 3, 6, 12, 24時間の膿清内SM又はKM濃度変化を測定、此から両剤の乾酪性物質内移行量を計算した。

実験 1. SM 添加時 0 時間の膿清内濃度を測定し、此から該冷膿を構成する膿清対乾酪性物質の容積比を

算出することに成功した。

実験 2. 添加後各時間に於ける膿清内濃度と実験 1 の測定値から乾酪性物質内へのSM 及び KM の侵入を算出比較し、KM は SM より優れた侵入性を有することを証明した。此は抗生物質の粒子の大きさと関係しているかと考えられる。

実験 3. 磷酸緩衝液で作製した KM 対照液を用いて、KM は SM 同様、乾酪性物質には破壊吸収され難い一方、侵入には時間を要することを証明した。

文献

近藤茂：中部整災誌第1巻4号（発表予定）

Wilkinson, M. C. : J. Bone & Joint Surg. Vol. 36-B : No. 1.

Kondo, S. : Acta tuberc. japonica. Vol. 3 : No. 1.

京都外科集談会第351回例会

昭和 33 年 11 月 27 日

- (1) 根部切斷による外傷性上腕神経叢麻痺
2 例

外科Ⅰ 松永 守雄

- (2) 空腸線維腫による腸重積症の1例

市立長浜病院外科

中山昌和・中瀬 明・登根一広

55才の男、上腹部の疝痛様疼痛を主訴として来院、腸輪廓の出現及び臍左方の圧痛及び腫瘤より空腸重積症と診断、直ちに開腹し重積部を整腹した所、鶏卵大鶏卵形の腫瘤を認めたので腸管と共に切除した。腫瘤は浮腫性の線維腫であつた。空腸腫瘍による腸重積症は比較的稀なものであるが相当大きなポリープでも無症状に経過している事も剖検例によつて分るし、又非常に小さなものでも重積症を起している。この事はポリープは腸重積症準備状態でありこゝに炎症、浮腫等の局所の変化と急激な蠕動があり嵌入したと考える。

- (3) Primary Aldosteronism の手術所見

外科Ⅱ 木村忠司・増田強三

恒川 謙吾

最近経験した Primary aldosteronism の手術所見を述べた。患者は31才の男子で典型的な aldosteronism の症状を有し京大協成内科に於て此の病名を下

され左副腎に腫瘍の陰影を認めたので左副腎剔除のため当外科へ送られ9月9日手術、本症の麻酔は 1. 充分なる麻酔深度に達しにくいこと、2. 副腎剥離中に高血圧を来すこと等が報告されていたが、本例は、術中血圧は平静を保ち、麻酔深度も十分に得られた。

術前処置としては手術前日よりコーチゾン 50mg を使用、術後8日目迄漸減量しつつ続けた。手術は前方より開、臍尾部を上方に翻転し、脾静脈を中央例に剝離して行つてその直後に被膜を被つた十円銅貨大の副腎腫瘍を認め、これを副腎と共に切除した。副腎たる事を確認する為めに腎静脈を出して副腎静脈が此处から出て腫瘍発生部に侵入することをつきとめた。

組織学的には副腎腺腫であつた。

術後2週間にして凡ゆる術前症状の消失を見た。

- (4) 頭蓋骨に変化をみた fibrous dysplasia
の2例

外科Ⅰ 近藤祐之・半田譲二

真鍋 摂

最近教室で経験した頭蓋骨に変化を認めし fibrous dysplasia と思われる2例を報告する。

1) 症例1 20才 女。主訴は顔面醜形及び歩行障害。頭部線撮影により頭蓋全体に広汎な骨変化をみたが Leontiasis ossea の様相を呈しているものであ